

第5回区政改革懇談会・議事要旨

日時 第5回 平成20年6月11日(水)、19:00~21:00

会場 サンパール荒川 高砂・羽衣

議事要旨

開会

区側出席者自己紹介

1. 座長あいさつ

- ・ 第4回懇談会の議事要旨について、事前に配布したが皆様から御意見がなければ、確定してホームページに掲載する。
- ・ 前回は、地域別グループの初回ということで、顔合わせを含めて自由討議を行った。今回と次回は子育てについて地域別グループで討議し、次の後半には、各グループのまとめを報告する予定
- ・ 前期の提言報告書に出された内容のいくつかは今年度の事業に反映されており、区としても聞きっぱなしにしない姿勢を持っているので、前向きに、やりがいを持って討議してほしい。
- ・ 今回から、討議のテーマに沿った区の課長も出席するので、質問があれば回答をもらうことができる。

○ 事務局から資料説明

- ・ 前回要望の出された資料について配布している。また、これ以外にも不明な点等あれば、区職員が回答するので、随時伝えてほしい。

2. グループ討議

- ・ 【グループ討議の結果まとめ】別紙参照

3. 次回の日程について

○ 座長あいさつ

- ・ 次回の前半は、本日の続きを地域別グループで討議し、後半は、そのまとめを発表する。
- ・ 次回は7月15日(火)を予定している。

以上

第5回 区政改革懇談会 グループ討議の結果まとめ

平成20年6月11日(水)午後7時～9時 @サンパール荒川 高砂・羽衣

<南千住グループ>

1. 子育ての問題を聞く機会

【子育ての当事者に聞く機会】

- ・ 子育ての支援策や子育てを地域でどのように考えるかは、子育て中の当事者に聞くのが一番大事である。子育てが終わったような年代の人に聞くよりも、子育て当事者に聞く機会を多く作ることが大事であると思う。
- ・ 昨年秋頃、子育てについてのアンケートやモニター募集を実施していたが、その実態について教えて欲しい。また、アンケートの結果などを知りたい。

<区からの説明>

- ・ アンケートは平成19年10月に調査済みである。
- ・ モニターは25人募集し、平成20年7月に第一回のモニター会議を予定している。

2. 地域の大人が子どもの見守りなどに参加できる仕組み

【高齢者や時間のある大人が気軽に参加できる仕組み】

- ・ 子どもの登下校時の交通安全見守りに、高齢者や時間のある大人達が気軽に参加できる仕組みがあるとよい。元気な高齢者が見守りに参加したいと思っても、きっかけがつかめない。
- ・ 些細なことをきっかけに、子どもの見守り、子育て支援ができるような簡単な仕組みがあるとよい。

3. 学校や区の事業と地域の大人たちのかかわり

【学校の行事と地域の大人のかかわり】

- ・ 小学校や中学校の行事として空き缶拾いを行っているが、そうした事業に地域の大人たちも一緒に気軽に参加できるとよい。

【区の事業に地域の大人が参加できる仕組み】

- ・ 区では、子育て支援事業を行っている。それらの事業は、区と子育て当事者との間で進められており、地域の子育てに関心のある人がその事業にかかわることが出来ない仕組みになっている。区で進めている支援事業に、区民がボランティアとしてサポートできるような仕組みが必要である。

4. 子育て支援の地域の仲介者

【地域と子育て家庭を結ぶ仲介者が必要】

- ・ 地域に住んでいる人は子育ての家庭が見えず、子育て家庭が抱える課題について、地域の人が全く認識できない状況にある。子育て家庭と地域の間にはギャップがあり、このギャップを埋めるような仲介者の存在が必要である。
- ・ 仲介者は、課題を抱える子育て家庭と地域を結ぶ中間支援組織ともいえる。
- ・ そうした役割を町会長や民生委員が担っているが、今以上に、地域の課題を総合的に受け止め、行政の垣根を越えて動けるような支援組織又は支援者が求められる。
- ・ 最近では、そうした役割を果たす人をエリアマネージャーと呼ぶ人もいる。

- ・その仲介者が果たす役割の頭出しは、既にこれまでの議論をまとめた資料から出されている。

【子ども会と地域】

- ・子ども会の今の状況がどうなっているか、子どもと地域がいかに分離しているかを認識する必要がある。その中で、子ども会を活発化することによって地域にどんなメリットが生まれるかを明らかにする必要がある。

5. 0歳保育、待機児童、障がい児童の実態

【0歳保育、待機児童の実態】

- ・南千住地域で、現在の0歳児童の保育や入所待機児童がどれくらいいるのか、知りたい。また、障がい児や病児保育の実態も知りたい。
- ・南千住地域は、若い夫婦が急激に増えており、今後、子どもの数も増える。そうしたなかで、障がい児や病気の子どもの今より増える可能性もあるので、何らかの対応を準備しておく必要がある。
- ・障がい児へのサポート体制は重要だ。

<区からの説明>

- ・生後57日目からの0歳保育児童は、荒川区全体で4月現在185人である。待機児童は南千住地域と日暮里地域に多い。
- ・荒川区では病児保育は行っていない。病後児保育は、病院と隣接している保育所で一か所行っている。

6. 子どもの多さは南千住地域の特徴

【若い世代夫婦の急増と人材】

- ・共働きの若い夫婦が増えている一方、昼間家にいる母親も多くいる。こうした若い世代の中には色々な人材がいる。こうした人材を活用して、子育て支援の対応を考える必要がある。
- ・子どもが増えていることは、一方で色々な課題を抱えている子どもが多くいるということである。南千住地域は、そうした点からも、子育てについての支援などを積極的に進めるべき地域である。

7. 子ども会などへの支援

【荒川区少年団体指導者連絡会への支援】

- ・荒川区少年団体指導者連絡会に加入している子ども会が、区内の全ての子ども会でないとすれば、会への補助金などについては透明でなければならない。

8. 子育て支援のコミュニティサロン

【空き店舗を活用した子育てコミュニティサロン】

- ・商店街の空き店舗を活用したコミュニティサロンのようなものを作り、そこで子どもたちに軽食を出したり出来るとよい。かつての銭湯はそうした役割を果たしていた。

<荒川グループ>

1. 懇談会の目的

【コミュニティで何ができるかを見つけること】

- ・ この懇談会の提言内容として求められているものは何なのか？
- ・ 大テーマは「コミュニティ力の向上」であるので、懇談会では、コミュニティでできることを見つけることを目標に考える。

2. 行政が「コミュニティ」に求めるもの

【町会は区の情報を提供するルート】

- ・ コミュニティの核になるものは、やはり町会しかないと思う。
- ・ 区が町会に期待する役割として最も大きなものは、区の情報提供のルートだろう。

【区の情報提供ルートとしての機能】

- ・ 町会は、区が求める情報提供のルートとしてはあまり上手く機能していない。
- ・ 区は、町会以外にも分野ごとに委員会や協議会などを組織して、区民を取り込んでいる。

3. 町会とマンション自治会

【町会の人材不足】

- ・ 町会は、昼間仕事をしている人が参加しにくく、人材不足になっている。
- ・ もともと荒川区は職人の町。そこにサラリーマン世帯が入ってきた。しかし、今はその比率が逆転している。その点をしっかり分かって意識を変えないといけない。

【若い世代の町会離れ】

- ・ 若い世代の町会離れは、町会の必要性を感じていないからだ。
- ・ 町会とマンション自治会は、区の扱い方が違うのではないか。区からの情報提供や補助金の有無など違いがあるようだ。
- ・ マンション世帯は子どもを持つ世代が多い。それらの世代はPTAなどの組織で連携している。
- ・ マンション住民は、建物という共有の資産管理によるつながりもある。
- ・ マンション住民は、その地域の町会が行っているお祭りやゴミ回収などの恩恵を受けているのに、それを認識していないように感じる。

【町会とマンション世帯のコミュニケーションが必要】

- ・ マンション世帯には、子どものいる世帯が多いので、コミュニティで子育てを考えるには、マンション世帯と地域との結びつきをつくる必要がある。
- ・ 町会以外には、マンション自治会だけでなく商店会もある。これらがばらばらであることが地域の結びつきの障壁になっている。
- ・ マンションが自治会を作らず、その地域の町会に入っている例もあり、そこではそれなりにコミュニケーションが図られているようだ。
- ・ 町会もマンション自治会も商店会も全て同じ扱いにして区が施策を行うべき

<区からの説明>

- ・ マンション自治会であっても区に届出があれば、町会と同様の扱いになる。
- ・ マンションでは管理組合を組織するが、それはマンション自治会とは別のもの
- ・ 現在、マンション自治会として届出があるのは、区内に10団体前後

- ・ 管理組合長とマンション自治会長が同じ人物の場合、コミュニティとして上手くいく例が多いようである。
- ・ マンション自治会を組織しない場合でも、連絡員を設置するように指導して地域の町会とのコミュニケーションを図るように指導している。
- ・ また、町会・自治会は任意団体であるので、どの町会に参加しても自由である。
- ・ 強制的に町会費を取るのは違法になる恐れがある。

4. コミュニティの規模

【小学校区・連合自治会単位】

- ・ 現在、100以上の町会があるが、これは細かすぎるのではないか。小学校区程度の規模、世帯数では1000世帯以上あれば、町会も上手く機能できるのではないか。
- ・ かといって合併するには、しがらみなど様々な問題があるだろう。
- ・ 連合自治会を単位にしてコミュニティを考えたらどうか。

5. 住民が町会に求めるもの

【ゴミの処理とお祭り】

- ・ 結局、町会が必要だと思わなければ、どんどん町会は弱体化していく。
- ・ 町会の活動の大きな二つは、日常のゴミの処理とお祭りだ。

【お祭りをきっかけにしたつながり】

- ・ お祭りは若い世代が町会にかかわるきっかけになる。
- ・ 子どもがいる世帯には、お祭りの際に声をかけやすい。これは、町会とのコミュニケーションの機会になる。
- ・ また、一人ではきっかけをつかみにくい父親たちも、お祭りをきっかけに地域にかかわることができる。
- ・ お祭りを通して地域の人と顔見知りになることで、道で会った際に声を掛け合うようになり、安心感が持てた。
- ・ お葬式の際には、町会に協力してもらい費用が安く済んだ。
- ・ 一方で、町会に頼まず自分で手配すると町会の顔が立たない、ということもある。

<区からの説明>

【子育て世代が地域に関わるきっかけ支援】

- ・ 夏祭りは子育て世代が地域にかかわるきっかけになる。夏祭りへの補助金助成を平成20年度新規事業として開始した。

6. 若い世代・子どもと地域とのつながり

【単発のイベントだけではなく、結びつきの継続を】

- ・ 若い世代がかかわりを持ちやすい行事といえば、お祭り以外にも防災訓練がある。
- ・ お祭りや防災訓練は、イベントなのでその場限りのかかわりになってしまう。コミュニティ形成のためには、「人を集めるイベント」だけではなく、そのあとに「集めた人を橋渡しする」ことや、「結びつきが継続するようにサポート」することが大切だ。

【児童館(現ひろば館)のノウハウ】

- ・ 町屋ひろば館では、ノウハウがあり、そのために上手くいっている。
- ・ 年齢別事業以外に、一人でも通えるような多目的に使えるスペースがあることも魅力だ。そのような場で、日常的で継続的な結びつきがつくられている。
- ・ 若い世代に受け入れられるコミュニティづくりには、過去のしがらみやしきたりが無いことも重要だ。

- ・ 多世代の子どもたちが助け合って活動を行っている。その結びつきには、児童館（現ひろば館）の職員がコーディネーターになっている。その存在がとても重要である。

【子ども会の再生】

- ・ 区内にひろば館がこれだけあるのなら、そこに子ども会を作ったらどうか。
- ・ 区がはじめのきっかけをサポートするコーディネーター役を担うとよい。
- ・ 子どもたちがリーダーになって動き出すと、とてもいい活動が生まれる。
- ・ 町会単位に子ども会を作らせるように区が指導できないのか。
- ・ 子どもが減って町会から子ども会が消滅したまま、新住民が入ってきている。子ども会を再生すべきだ。
- ・ 「地域とかかわりたくない」という大人がいるのと違って、子どもは地域で友達や仲間とかかわりあいたいと思っているはずだ。

【子ども達自身が事業を行うことが大切】

- ・ 大人が子どもに「してあげる」事業ではなく、子ども達自身が「やる」事業が大切。
- ・ 行政が「区民に何をしてあげるか」ではなく、「区民に何をやってもらうか」を考えることはコミュニティ形成にとって、時間がかかるが大切なことだ。
- ・ 青少連の「シニアリーダー」の仕組みを全区に広めたらどうか。

<区からの説明>

【イベントリーダー】

- ・ 青少連では、運営責任は大人が担っているが、実働面では子ども達が「シニアリーダー」として活動して運営している。大人は助言するだけである。
- ・ また、その大人たちも子ども時代はシニアリーダーとして活動していたOBが多く、いいサイクルができています。
- ・ 登録団体は、尾久と南千住に多く、地域に偏りがある。

【学校とコミュニティの結びつき】

- ・ イベントの際には、町会と学校で相互に交流がある。
- ・ 副校長が必ず町会長になる学校が荒川区内にある。
- ・ 足立区では、学校が町会に所属している例もある。
- ・ ひとつの学区に複数の町会があるために結びつきが作りにくいのではないかと。
- ・ 校庭開放のルールも見直しが必要だ。別の学校の児童生徒が入れないのはおかしい。
- ・ 校庭に“悪い子”を入れないために、その他の子ども達が入れなくなっている。“悪い子にさせない”ことのほうに努力すべき。
- ・ 地域の中高生を小学校の校庭利用のリーダーとして育成したらどうか。
- ・ 学校自由選択制が地域と子ども達の結びつきの障壁になっているのではないかと。この制度の本当のねらいと実態、課題を知りたい。また、この制度と「学力向上マニフェスト」との関連はどうなっているのか。

<区からの説明>

【子どもとコミュニティ】

- ・ 子どもの集まる核となるのは小学校である。そこにはPTAなどの組織がある。コミュニティをすべて町会に当てはめるのは無理がある。重層的に考えるといいのだろう。
- ・ コミュニティの領域に行政がかかわりすぎているとも言える。今後は、コミュニティによる自発的な活動を支援したい。

<町屋グループ>

1. 区の子育て支援

- ・ 区の事業が活用されない理由を知りたい。問題のとらえ方が違うのではないか。費用対効果を見ることも必要だ。
- ・ 区でどんなニーズがあるのか調べたことを教えて欲しい。調べているのだろうが、それが当たっているのか疑問。

2. 子育て支援の必要性

【子育てをする親の多様性】

- ・ 子育てをしている親が支援を必要としているのか疑問がある。
- ・ 子育てに対する支援内容は、子どもの年齢によって違うのではないか。幼児期に特に需要があるのではないか。
- ・ 今の子育て世代は比較的夫婦で育てる傾向にあるが、親の状況も家庭によって差があるため、支援の方向性は一つではないのではないか。

【職業を持つ母親の状況】

- ・ 働く親は学校行事に参加するのが大変だ。
- ・ 気軽に仕事を休めないで、子どもが病気の時に面倒を見てくれる人が必要だ。
- ・ 働く親のために幼児を預かるサポートをしている人を知っている。

【専業主婦の母親状況】

- ・ 専業主婦で引きこもりがちな母親に支援が必要ではないか。働く母親には相談するチャンネルや機会が多くあるが、専業主婦は行き場がない。
- ・ 気軽に集まれる場づくりが必要なのではないか。

【障がいを持つ母親の状況】

- ・ 難病を患っている方にとっては、子育ては大変だ。お風呂に入れるサービスなど、ヘルパーに手伝われないことがある。特に外から来た人は、コミュニティになじみにくいので、助けを得られにくい

3. 子育てに関するジェネレーションギャップ

【中高年世代の男性から見た最近の子育て状況】

- ・ お母さんに子育てについての問題意識がないのが問題。子育てでどうしたいのかを考えるべきだ。
- ・ 親があいさつできていないので、親の教育も必要だ。
- ・ 親も育て方を知らないで、保育園などで他人の手を借りることも必要。集団で教育することで養われる社会性も重要だ。
- ・ 最近、情報誌やインターネットで情報が氾濫しているが、これらの情報は間違っている場合もあるので、経験者の助言が必要だ。

【中高年世代の女性から見た最近の子育て状況】

- ・ お母さんは色々なことを一人で背負いすぎている。
- ・ 家庭に訪問しても警戒されてしまう。話を聞くより話をしたいのではないか。
- ・ 相談に行くのは大変なので、訪問して話を聞いてくれる人が必要だ。
- ・ お母さんの悩みを気軽に話せる場があるとよい。

【子育て中の親の意識】

- ・ 子育ての状況はインターネットや親同士で交換している。経験者よりは同じ立場の人と情報交換したい。

4. 子どもが遊ぶ環境

【遊び場の状況】

- ・ 公園は避難場所としても利用されるため、遊具がなく、舗装されている所が多い。子どもにとっては使いづらいのではないかと。また、土や芝生が必要ではないかと。余り利用されていない気がする。
- ・ 原公園はマンションの前にあるので、子どもが集まりやすい。
- ・ 家庭には遊び場の情報は伝わっている。

【子どもの遊び方】

- ・ 町屋地区は、街中に子どもがいて子ども同士で遊んでいるが、子どもたちは集団での遊びをしていない。一人っ子が多いのかかわり方が分からないのではないかと。
- ・ ナイフやゴム鉄砲、のこぎり等の使い方が分からない子どもがほとんどだと感じる。
- ・ 野球やサッカーなどは、遊びではなく勝つか負けるかの勝負事になっている。
- ・ 子どもも習い事などで忙しい。
- ・ 子どもの方でも楽しいものを選択している。

【大人の関わり方】

- ・ 子どものインターネットの利用について、コントロールできないかと。
- ・ 子どもの体験談から危険を感じることもある。保護者の下で危機感を体験させることはできないかと。危険に対するシミュレーションが必要だ。
- ・ 高校3年生まで見守ることが大切だ。
- ・ 地域の大人は自然に声掛けができています。
- ・ 子ども間の体験に格差が出ていて、施策の一本化は難しい。

5. 子どもと地域のかかわり方

【学校や子どもの組織】

- ・ 町屋地区には子ども会がない。
- ・ 学校自由選択制により、地域とのつながりが薄くなる。最初の取掛かりが大切だ。

【お祭りへのかかわり】

- ・ お祭りには皆集まっているようだ。
- ・ 町会によってもお祭りの力の入れ方に差があるが、参加者が増えているように感じる。

6. 学校の状況

- ・ 障がい児の普通学級への参加をサポートする人がいるが、募集状況や利用状況、学校がどんなことに困っているか、を知りたい。

<尾久グループ>

1. 子どもをめぐる現状

【小学校の自由選択制による親のつながりの希薄化】

- ・ 学校での親のつながりは重要だが、それが育たない。
- ・ 子どもの安全を見守るために地域の登校班があった。これは親の地域的な連携がないとできないところがある。これで地域的な連携・協力体制がやりやすかったが、学校自由選択制になって大変難しくなった。
- ・ 自由選択制は時代の流れだし、学校教育でも競争することは必要で、親がしっかりしていればよいのではないかと。

- ・ 学校自由選択制に伴い、情報が少ない中で一面的な評価で学校を選ぶ傾向がある。それが子どもや先生に大きな影響を与えている。
- ・ 連絡協議会は今も残っていて、それが活用できないか。

【青少年の生活スタイルの崩壊】

- ・ 大学生の集中力が低い。90分授業を受講していても、もって45分だ。
- ・ 今の大学生には感動したり、共感したりする反応が乏しい。小・中学時代の生活スタイルにその原因があると感ずることがある。

【学校に関する課題】

- ・ 親を対象に、子育てセミナーで今後の生活にかかる費用をファイナンシャルプランナーとして最近ボランティアで行ってみた。そこで受ける相談は深刻なものだ。
- ・ 小学校、中学校、高校、大学と上下の交流がないため、社会や組織のルールや規範を自ら学ぶ機会がなくなっている。
- ・ 小・中・高校の先生との交流がない。
- ・ 地域と小・中・高校の関係者が意見交換のできる機会や場を設ける。
- ・ 学校の先生は教育委員会や文部科学省に提出するための報告書作成などの雑用が多く、忙しすぎる。
- ・ 授業や子どもたちと接する時間を増やす仕組みにする必要がある。

2. 子育て問題を考える視点

【地域の住まい方】

- ・ 子育てだけに狭く考えるのではなく、居住の仕方、地域の空間の在り方などを併せて子どもの育つ環境を考えることが必要だ。

【家庭教育】

- ・ 家庭教育が一番大事で、その在り方を考える。

3. 子育て環境づくりに向けて

【子どもたちの自主的な活動】

- ・ 都電荒川線「東尾久3丁目」停留所付近で、ごみ拾いをしている小学高学年の子ども数名を見たことがある。大人たちもいなく、自分たちで自主的にしているようだった。いいところもあり地域として捨てたものではない。

【子どもへのボランティア教育】

- ・ 子どものボランティア教育に力をつける。小・中学校で熱心にやっているところもある。
- ・ 入学時・進級時に親子のマナー教育を実施したらよい。
- ・ 多摩地区などの、東京の緑を守るための森林ボランティアをやったらよい。子どもたちの将来の地球環境にもよい。

【総合的な活動ができる施設】

- ・ 地域資源を活用して、総合的にいろいろな活動で利用でき、空間が一体となっている施設を作るのはどうか。
- ・ 区民が行うサービス利用や情報が複合的に利用できる施設やフレキシブルでいろいろなことが交流できる施設も考えられる。

【学校の空きスペースの活用】

- ・ 気楽に触れ合える交流の場が必要と思うが、なかなかできない。
- ・ 保育所が不足しているようなので、小学校・中学校の空いたスペースに併設にしたらどうか。年代の違う子どもたちと一緒に遊ぶことができる。

- ・ 学校の空きスペース利用は施設管理者の安全性の問題があり難しい面がある。そこをどうクリアするか。
- ・ 放課後は地域の責任で管理するようにした方がよい。

【SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)などのネットワークの活用】

- ・ 子育て世代のネットワークを十分に生かせる方策が必要と思う。
- ・ mixi のコミュニティに参加している。管理者もしっかりしていて、紹介がないと入れないウェブサイトだ。荒川区で2,000人、東尾久800人ぐらいの20~30歳代を中心に参加している。
- ・ 区政改革懇談会に対しても発信したら反応がよく、好意的な意見が多かった。
- ・ まじめに考えている人が多く、このようなネットワークは使えるのではないかと思う。

4. 安全・安心なまちをつくる

【道路を安全にして、コミュニティの場としての整備】

- ・ 道路の植栽の管理が悪く、自転車が大きく車道にはみ出てしまう。
- ・ 道路の車優先や自転車の歩道走行の禁止などを行う。
- ・ 道路を安全にし、昔のように地域の人が挨拶や話ができるようなコミュニティの場に復活する。

【住民の組織や体制づくりに対する工夫】

- ・ 防犯パトロールなど、行政の各分野で住民の組織づくりに取り組んでいるが、呼び掛けがいつも同じ人に偏っているため、新しいメンバーに広がらない。呼び掛けには工夫をしてほしい。
- ・ マンションを建てる際、コミュニティとのかかわり合いをもっと強くなるように指導する。条例がいかされていない。

<日暮里グループ>

1. 家庭の地域コミュニティへの参加

【子育てに関する情報】

- ・ 子育てをする上で一番役立ったのが幼稚園の親同士の口コミ情報だった。
- ・ この区政改革懇談会のような場を活用して今の親が何を求めているか聞いてみたい。マンションに住んでいる家庭については、情報がまったくつかめない。

【豊富な情報量と子育ての選択肢の増加】

- ・ 家庭は顔の見える一番小さな単位。子育ては家庭が核となる。
- ・ 今の時代は情報量が多く、選択肢が広がっている。そのため、家庭で抱える問題の解決方法も多様になり、子育て支援を町会に頼ることが少なくなっている。
- ・ 荒川区は幼児の子育て支援施策が充実していると区外から移り住んでくる人々もいる。
- ・ しかし、条件を求めて動く人たちは地域に根付かない。「個人主義」(=自分勝手)、自由主義、権利思考の蔓延だ。
- ・ もし自分が他所からマンションに越してきた共働きなどのサラリーマン世帯だったらどう動くだろうか？その立場に立って考えてみることも必要である。
- ・ 父親は日常的な付き合いがないが、母親は特に幼稚園、保育園頃の子育て期にできたつながりが強くなる。

2. 子ども

【子どもと地域とのかかわり】

- ・ 子どもは自分で工夫していろいろな遊びを考えていくものである。
- ・ 子どもが友達の家を行き来するうちに親同士のつながりも生まれてくる。
- ・ 20～30歳代になると、地元の友達と会う機会が減ってくる。逆に50～60歳代になると同窓会などで集まる機会が増えてくる。
- ・ 子ども同士の関係も、親同士の関係も、良好な関係ができていれば、一時期会わない期間があってもいつかは戻ってくるものだ。
- ・ 子どもの上下関係は、大人よりも強い。親の役職などで優越感を感じている子も多いようだ。
- ・ また、地域の中には、溶け込みたくても溶け込めない子どもがいるのも事実だ。これは、親の意向など家庭環境による影響が大きい。

3. 町会と子育て

【子育て家庭と町会とのかかわり】

- ・ 町会に引き込みたいが、引き込めない。町会が子育ての担い手になるのは難しいし、子育て家族も町会に支援を求めている。
- ・ 町会とのかかわりを持つきっかけといえば、祖父母が町会活動をしていたことが大きい。また、子ども会の活動を通して、子どもを持つ家庭とも付き合いができた。こうした幅広いつながりが持てたのも家庭環境のおかげだと思う。
- ・ 町会の行事などをきっかけに地域コミュニティへの参加を促したり、地域への愛着を高めたりしていきたい。
- ・ 今は、しがらみのない新しい人たちが入ってきて、昔よりある意味自由に暮らしができるようになってきている。
- ・ 子育てをテーマにしたコミュニティの創出が必要。町会・自治会との連携が必要。そのために行政が「場」の提供を含めて総合プロデュースする。

4. 学校の役割

【学校の地域コミュニティづくりの「媒介」機能】

- ・ 昔は学校生活を通して子ども同士、親同士の情報交換の場になっていた。学校は地域コミュニティをつくる上での「媒介」機能を持っている。
- ・ 今は、人と人とのつながりが希薄になっているが、学校も同じである。

【今の学校と地域コミュニティとのつながり方】

- ・ 学校自由選択制になって地域とのつながりが切れてしまっている。学力を上げることばかりに重点を置くのは問題である。
- ・ 学校自由選択制になったために地域との関係が希薄になったといわれているが、希薄になった原因はそればかりではないのではないか。地域コミュニティに参加するかどうかは、親の意識が大きく関わってくる。
- ・ 中学生くらいになると子どもたちは区外の学校に通うようになる。確かに地域の行事への参加が減るかもしれないが、地域の行事に区外の友達を連れてきたり、逆に区外の行事に遊びに行ったりしている。

【放課後の施設開放】

- ・ 学校開放はよいことだが責任はだれが取べきか。PTA や町会では難しいのではないかな。

- ・ 宮前小学校などの放課後の施設開放については、まず、学校が受け入れたということに意味がある。先生ばかりに求めない方がよいのではないか。先生は他にたくさんの仕事を抱えている。余り負担させない方がよい。

<区からの説明>

【放課後子どもスクール】

- ・ 学校を地域の拠点とするために、地域住民とともに放課後の施設開放を行っている。現在はモデル事業として第一日暮里小学校と宮前小学校の2校で実施している。
- ・ 対象者はその小学校に通う全児童としている。類似事業である学童クラブは低学年のみを対象としている。1日平均70名ほどが利用している。
- ・ 第一日暮里小学校は、管理を民間に委託している。下校時のパトロールはシルバー人材センターに委託している。最終的にはPTAなど地域による管理も想定されるが、現在は試行段階なので民間委託という形をとっている。
- ・ 第一日暮里小学校では月～金曜日の5時まで、宮前小学校では月～土曜日の6時まで行っている。
- ・ 宮前小学校では保険金として500円徴収している。

7. 子どもと親の交流の場

【子ども会やスポーツクラブ】

- ・ 昔は子ども会といえば、班単位にあり活動も活発だったが、最近はない地域もあるようだ。
- ・ 子どもの数が減っているため、子どもが集まる場は児童館や子ども向けのスポーツクラブになってきている。そこでは子どもだけではなく親同士の子育てのやり方など互いに教わることができた。ここで培われた関係は、子育てが終わってからでも生きている。

【児童館(現ひろば館)】

- ・ 子どもたちが通う児童館(現ひろば館)は、家から近いという理由ばかりでなく、「あそこの児童館(現ひろば館)がよい」「勤め先から近い」など、親の意向で決めることが多い。そのため、子どもたちは区域を越えて児童館(現ひろば館)に通うケースが多くなる。
- ・ 児童館(現ひろば館)の中にある学童クラブも全員に平等に利用させてほしい。専業主婦家庭は利用できないなど条件がある。

【子どもが集うきっかけ】

- ・ 特に西日暮里地区では、昔と比べて子どもが遊べる場所が少ない。
- ・ 町会のイベントなど子どもたちが集うきっかけはあるが、最近の子どもたちは事前にイベントに関する情報を親などから仕入れて、「こんなものか」と興味が起こらず参加しなくなってきている。
- ・ 先日、駅前広場の完成記念イベントがあったが、子どもたちはほとんどいなかった。大人向けのイベントだから仕方がないが、子どもたちもこうしたイベントにできるだけ呼び込みたい。
- ・ 子ども会の行事に子どもが参加するかは、親の行事への参加意識が大きく影響する。親が子どもを行かせる時間と場所を選んでいる。
- ・ 子どもが参加したいと思うイベントにするためには、大人ばかりが企画するのではダメ。子どもが自分で考えて企画するなど、子どもの意見を採り入れて、子どもが主体的に参加できるイベントにすることが大事である。

以上